中村俊定文庫
文庫 18
179
1

京傳云

後餘花千二百句

上

宮城文庫

# 後餘花千二百句

北叡　嘉江

ふるさとの第五句竟
宴の発句なり
らうらけ沸き
なつかして古今
わっかふといふ
古今序の初之

比えもいのまとの風
合歓ネ一節玉蘂ん蕭　沾涼
寄舟の書を湖く松山ゆく嘉沾
尺八吹う竪一まとろう午寂

合歓八豊臣太
むなむ八拾枝
の字体なり
地江も明
海と方架

地賛斗一代焙一戻り　荻水
鏡乃さやしらず　白雲
長久八姫口をとろ月代友　風楽
かつらくろ細掛てをくろ　涼純
衣うつ文祖板えありかるや　昌貫

中村俊定文庫

たゝ
ふと蜘蛛の通 琴風
お生れ筆ふ指るかきつけて 雪凍
人をたゝれ山椒はたれと 岩翁
濁るもの塵なく眠きる大祝 眉丘
筆をとるすきもなく井川へ来る 来技
袖へまハ入るさの山雲となり 楓子
年ホトキとゝ外と巣ヲ 面白つる波星
腰ちらハいつる縄ばるよ寄 和雄
月も周防のすみよ洗 佳風
義ようつ物きを自をひく司石 丸繁

結縄ノ文字の略し
宗祇説集竟宴の百首は絶世代を者とゝ

狭山俱馬

笑ひきひ〳〵く鉢厨子 虎狼
小了筍廣さこうへのそれ心 羽州秋田 至亭
さゝなのき柳ときよ感 燕
皺面ハ莫勒すな希れ寿乃首 桃子
却こう道ゝ九折なー 沽化
こう衣紫鼻をたゝく唐衣 一言
きいせい姫ー れ塗ようり 一和
細枝のさハむ往て捨たてむゝめ 松巴
啓ちゝ〳〵ちし清をひつゝて 遊宇
埋てもいろはの里ゝ去ゝとろ 少舞

ゆゝハゆめ〳〵
めめもちりふ
いゝおちよ学
万ふ

梁り音光に
やゝれ又ゝ衣
竟衣

鶺鴒の事を云
捨も奥河に聲せぬ虫の声　秋常
笄ハ非翡翠かんざしや　書哉

嵯峨川を渡らむ人のいりてかハ伊勢物語
夫婦の志ゆりか流れ染川　東郊(?)
執盞よ君ハ志らをやさん盃　梅枝

執盞　行列の□□役
酌の立具ふをかけ候　沾石
人男れ耳い端かし風の月　篭谷(?)
昇殿以後の□ゆきさゆふ　桃紅

龍の黒とうりようなり
二う
誓つ衆れ身をおしからと挿やらき　又里
渋黄縮よ袖あて加減　海宇

針筒の形
針筒ハ早速走さとくさ刹　目洲(?)　隣笛

起ていらんせ波太鼓と　秋芝(?)

馬の人そ推量すへし
知らぬよとてやら足ぬれたつき　百里
こゑ銭よう執と湯より合点つ　言求
弦鳴れ比叡とひとふもの之新　流[illegible]

ひさき炬屋之
同屋乃不こり纏を嫌ふるを　沾岳

ありき時の□□底まとなるし
十六夜や汐決しき蕨も麁かり　沾[illegible]
手綵て鐘も鮭桶きん　音釣玄

附ハこきをれと平竟裸身にてはならく形となり
さてあらぬ身今も角大師　文東
古稀のもてハ国恩を述　和風
暮垣乃芒ハ白衣て花を抱如蒿

猶活し枝さく二挺目は鋤 朝松
三ヨウラン
和毛ゐがつらも東風ふかひく境菫堂
てるて北陸て密くは雛露活
優曇華ハ五風呂桶て育ちて 蕣月
曲り月より雑役ハ仕ル 湖十
雑会を誘かれて田悔も 治宇
古具足ハ孫ハ示於紫 雨橋
今年ハといひて嘘枇杷花 仙星
七里ヶ樹て青絶日せてき 羽光
夜川月て夜見乃雪もゆく林車

雑役の仕ル
とうのらく
傳承草
も雑役
雪ふと
ばかれそう
ゆらなり

ちるて乃猶いていくおる 凍雲
水鶏ハ嫌の道ハさ草ハ上 望月
筑波と新て侍者ハ迷ハ次 紅陽
我宿のをくひつ片思ハ 行真
言本ときれ書ふハ 朝叟
三八
小社も十万石をたてふ 東盛
四会芝居ハ年ハ保 安士
八幡の滝も えとを 眠 栢十
ゆさとかへふ洗濯ハ 石 序令
夜ふて鯉も 古歌 乃 暗め

侍者
おもとひとし

伝地の
沖ちとら
さの〜ひら
ちもてそ

みれさとう
ちんし

衆方規矩にて星をいさゝく　柯木
末のゐへはよゝとうて風流　竹宇
五畿七道をめぐる　旅　竹翠　在川
この文明にてゝゝ八雲とあとい　橋合
鼻をゝちかむ夕ゝ　反　李渓
反流風はあるを月に換ふを　在北
露ちん火を隠これ山車　也北
入後にあきい蓮四郎の花竹苞
施をもちゆ俳乃をかへる袖　仙宇
名　ひき安れ　沾山

妙音院　保元記
大政大臣師長公
琵琶の伝授を
三絃にうつして
とれる

女の琵琶養年　多力高　只尺
ゐれるも　ぬを完のひつにる　古雅
琵琶乃原　面と茶　撰ゆ一　我兄
秋宜言秋隔年秋すれ　子江
ヒにかゝまくをと　菊の眉　子駿
光生る苦菜と飽ち目逆筋　参州吉田　皆可
きふ資朝に成て　式分とハ　夏伝
宴のこ掲　蓮ひつめて坂の月　沾竹
指ち秋も　舳田の町　蓮　柳芳
中帝ハ飛鳥　鉢ふ筆を買ゝきん　古洲

覃旨の綸乃石に書ひるを　鈴梁

七りぬいふ小濱ぬるらふ　千山

志波ちふ入て取の香を踏　秋石

列子御風　蓼

風御ひは一日おまても　蓮之

水と汐との類を横ふし　京　珠舍

子せ寅和ハ彩　作れるり書　水色

近江湖晴て焦くさい　峰　舞蛟

樞干八人こへて光ら見宜雨

新さいらこれ奪と丸盆　沾枝

むさそふ津の画船も千鳥り鋤鍵

庵杖三す　（不明）所　雲　沾洲

丸盆ハ南部の内枝のいり

むさそふ津の心しも鳴るとのち地なり

石山ハ新さ

源氏写原さ

よあり是より

八百頃乃内ハ

平義の近江

の八景をらし

石山秋月　沾徳

強馬も出られ新果ー　千山　秋月

肩をさし　弦筋彩さや　万旅

寒の多破璃する蓋秋之天　仙蓋

南さ見し　ら多今年八月玉蓋

さんよやく　ら見ぬ　堺きふ戻る　煙　氷竜

新市いれ　参州吉田角阿

多作よハこ　堺河巻　沾岩

十二つ人ち　横南　ち　ふ　沾翅

目ぬちのよい日とそのハ仕の数　菊畹

都督府
筑紫宰府

鶯一声ふくる里ぬちりきむ　相州播村　可水
鶯の声吹草荒礎をおこすり　湖舟
瓦ぬ吟味都督府よ入る　執筆
綿買よ瓦ぬさぬ拾ひ　同州多敢　活雪
男の蓋シよ喧嘩ぬらた先　泄谷
小さいを振り人をとるふ　清去
とまい王家ぬ拾ひ　回川
山科ぬ日負ぬ渋乃吉　子簾
摩登伽女ぬ
ぬ立なり
半毎ぬたまされ撈厳の月　雨亭
賢絵ぬ俊節きく神の家　仙蕙　拾意

夏陸尾張の
ぬとぬ
鮎の名ぬ
腰物の名

日本一乃追風ぬ矣　甲州　徳舟
土場毎よ知人ぬと花の声　立志
流り扈従よ弱る独活　吉田　玉影
二
ぬ入翅ぬ入翅ぬ蕃国　暁井
ぬ領のすぬ米をぬかり　子田
揚ぬ揚ぬ揚の手拍二王ふく　白雲
れをすぬ庵ぬ庵ぬ庵ぬ焼られ　活枝
俗形をかむる人よ伝ぬ　琴風
坂を苦よせぬ巴ぬ門米　堵岩
ぬんかぬぬ常ぬぬ常ぬぬ　巴人

丁張もらすれのく　法雲
寿命の千歳遠く禄ゆたかなる　苔城
警布袋よりはすかさう　羽州孤竹
賀茂を又流らるものは　沃雄
たてくり流るをこさきさう負　法徳
生年から流る水の下や　谷
うら山吹き論ぜるを利　古井
自刎を遁さ支度はなるとも　甘谷
馬刀をたてくりや牛はなる角　賦家
捻和中をを抱る兼ね山　青我

かぎを又
のれ　歌の
又呼ばれ
るをうたり
るをうるせ
のお川のあ
とも大山うた

をこうはを
んうるう
ちうる夫
ちうり拡
山のはこせ
とも

啓ず廊へりをを法人　文益
治洲をたこ　観音の奥孤百へ来ひ高さ　法洲
夏下第を蘭山　高より　蓮之
高めきるを水　似い已と見るのひきかく　法山
おり
けをもを　ばつをつを水うの　子ふう　金　安士
おり
飛鳥園本寺　舒明天皇七四年　今ち法寺
子四をを　去老ありと高く　毛言法　文東　柯木
かかれと石を　響ひ彫　貞佐
船ハ草ふ　高鮪つける　月　海宇
刑休う後を　鉢ハを高ひる　家ハそかひる　鉢梁

住吉社第五

このねぎしの塔を拝し歩雀

三

大名ゆかりの水鳥をうる　沽字

竹よ竹何の酒よ君を　沽石

朝鮮地

引よせてたへよする釜山海　岱燕

旅人の上の白と　話りよ和歌

杉檜ハ坂一つみて行くは東彩

一つ、の年　孫屋　栄子

弟屋　栄長四海

後の方

雑ハなく鉦にかれのやみ　沽化

金毒しまさきの月　只尺

右近係左の

昔北役者

まを打つ向ひの北近六畳月

大後巻乃浦より鈴鹿引　序令

堂毛の背中重ねを宿カ　鶴洲

鹿ハ芦落る音蘭秋炉る　朝賀

月ハ舟ハ陸平ハ小蓑　沽枝

鹿ハ鹿ハ六人　仙蓑

三

一行茶くハ北里の雲ハ中　文田

芦宿ハ紙いとを　立志

東北矢ハ又ハ形面の水海　沽徳

とハ仁者ハ静の粒鉄　祇空

大木ハ斧切ハ拍思ハ　蓮之

仲秋ハ月ハ
くもとハ北里の所
ハ山ハ

くもとハ里
山塚ハ陽の下

一年ハ月ハ
ハく水海と
山如仁者静
よきもの
秋ともし

所んともよ　汁を激こがす女雑炊き　沽宇
灯を抱く影よりもしんかんき　安士
贅よおもふあるく　数物　沽山
苗ふを恵に知る以川の音　真侘
鞍こそよきはよい板こそ　鈴谷
彩和中ともいさを割むも盤　沽洲
藤の下より現く屋根炊き　文京
月八我らは寂む新所帯　桃子
名
塔跡（必ずと思ふ眼鏡　貴　立志
をよしたのはよ川の音　朝望

注ぐ〻ともいとしんつまなを
中伝　昔の茶に
後拾遺　秋の時雨
後拾遺　
根岸を
のねろいを
ろをとふ

何を負てゆく箒木ちちを吟ふ　莨莪
小きりめふ地を掃く中（大拾遺　序令
六義　おかつ〻妙を京　山夕
我玉を包まるを箒のん　沽石
さび寂く字法は今数　壷月
頃五時去例とある引　和推
霧京汗とこゆる一根呂　柯木
及うて瑠璃ふうとあて言　祇空
掃るさ〻く炭国投むれ　賀燕
杉立京宿とひしく弦屋　鍬粱

大会は秋迎ふる豆腐つくまき　白雲
金沢は四百四病を洗へども　山夕
九十九子産恪気仕めさる　沽洲
詩経斯ウ血書ハ何のそなへ　又白
篇いるこハ如きものと思ふ　琴風
ふきものと思ふ　和推
一句なり　弱水　谷
不が刑走の句　礼記
刑をかへて　沽徳
きやの色紙　巻紗綾の縁部よめわと　仙鶴
あ仏文也　さらきぬ君ハ夜のうくひす　祇空
新古今　四ぬそ野辺ち　蓮之
山ふ仏庵の　口添てさらや　名ら角庵
庵ハ秋ハ野ら　中下ち　離ふ仏乃上く
ちて朝ハ野ら

水の満ル時ハ
ハたゝて之低
き方へ走ル
地しあふ庵ハ
ゑ低き物し

栗　沽時嵐
紙きるへ水のあハはや砂嵐　沽徳
きちふよる種ものなれる　青峩
大の字ハ乾く白ひ月高く　沽洲
くもりそもる十里さわ寒　沽十
切板とひしと高きそそ山　琴風
冬の傳さる胡椒つか挽く　祇空
帆を一ツ僅石垣ハちこ彩ら　仙鶴
見ま いそ今投ら迄さ　和推
地義からう年ハ高る松の煙　朝叟

石垣ハ彩ゑと
て遠の中
遠ふ人ふと
ふ彩し

町の者ともかつぶつ　襟風繁
夏代参乃亭より仙合句相談　参谷
三巡り目より在こつゆはく　又旦
庵下もちすゑ古代敷をなを　海宇
環堵をとうとこの人を称ふ　沾山
四ツ市代口の迷ひ琴書画　蓮之
江月浪人　四ツ過ぎ月　癖面
遠刑ざいえ　芭蕉毛のさき書原　貞佐
今に芽人　ゆ来る翡翠　春月
ゆ来ふ　椿子
警者も四へ形えの太鼓ゆ時代

上十一

奥遠牛　沾化
鄙ゆ　白雲
漆丈おうと海苔ハせめ　仙里
二
初午の命ゆ　只尺
猿よ掃ゆ　沾岳
つきゆ　文東
白い袋の　柯木
人形ゆ　乃橋
老ゆ　蓮之
老ゆ　鉄梁

皆ゆ
集義和書
ゆ知るくして
学あゆ人の
沾を
自覚を
学る
あきと不
分明

五尺の拄杖うけたこの人ぞ　松巴
義之流の位置もゆたかなる月　素峨
瓢亭屋より夢んくと出　琴風
月と鼻孔間を和中貴人きい　文臣
[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
身は番椒加持れつよさ月　沾德
姫つきく大和巡り伏を拔　祇空
さらさらきめいをもおめ[illegible]　朝叟
大切をけもも入んと[illegible]や　蘂雨
[illegible]拾ひ[illegible]　仙露
[illegible]拾ひとく年のなを　[illegible]月

[illegible]　名よ寝ら[illegible]　沾洲
表[illegible]　[illegible]　佑山
魚軒ハ世車[illegible]　あ士
[illegible]
押おし　湖十
[illegible]　貞佐
[illegible]　文東
[illegible]
[illegible]　[illegible]谷
冬の日[illegible]仕[illegible]入る[illegible]　風柴
牛久保冬列　牛久保倒し　清油[illegible]竹鍋　只尺
茶ものよめ[illegible]つきみ[illegible]　和推

つゝめいを抜き陽炎を伸　海宇
春雨よりこゝろ芽ぐむ柳の糸　松巴
世上孔（音）雀ちるよりまさるよ星　椿子
たゝかひのけうこの年老て敬衣　仙里
敬衣
服衣なり
波ゝをとめて　白玄
彫刻なる形ハ合ひの思ひ　佶岳
るまさく
青年雄を云
男色のなこ
おぼ流えしめい肢小塔梅
松山孔　波　彫（ほ）なとに思ひのハ
賛かくはい東坡お見蓮　面橋
さを海赤　孔ひもたゝ大点　安士
かゝくてみよ　身ともハ孤色ちとなしよを　繁
傘こ散を孔柳佶よさん　柯木

秋のもるしを風呂敷山　沾化
世りよりんへ寄引と立孔月　蓮之
木ゝ孔一かふのうゝくる　湖十
叶へをこせくむをよ乃弥亜　谷
この下ゝ色黄ハ丈　沙沾　風楽
こゝ　竹植ハ元来あり白色果　海宇

藕彩　蓮根の　皆こく藕彩山かさハつく　文東
彩こ山こさハ　那智てこ　こ巴九よ再お今り　沾化
きりと山の　こ加へをさこふを毛槌を五　沾山
降こりし　夕雪こる山こ　こ加へをさこふを毛槌を五　沾山
つきて立島の　敬　散乃後ゝ新ハ石ゝ高　沾人
ふ戦を

あめこ孔
ことのこ
伊勢和泉
孔ちこ

原氏の佛堂を長清なり

佛陀阿附と長清よ岁　鑑雨
八月の彼岸乃新さす男山　琴嵐
元利くはけれ四十雇うつ　詰岳
舟蛇地穴へも入らす穴かて　白雲
穴賢おそ
うきしおそ
きおるまる
まうなり
瓢箪とつくつ二王さしし　安士
肩のうくに目病れ所とらはし　詰德
多くよ名もかそき蚤は　柯木
京大坂のなと
花再ひ京の湯屋れきき　仙露
奈良法花寺
以丘尼仕るれ大地てくるき　葦月
名
平物の十分一場る干のかりて　鍬梁

多を文してくれとて弥八波　松巴
絵り器れかとけ所もまき知れ　詰洲
祇王の妹よりたちの叔父事あ　青峩
水月二人れ殊数ちやちちく　面橋
松をも見せ江戸れたることや　和推
聖神よ故会といへるのさとりハ　貞化
郎ることれ　れ所をくきる　文魚
奥庭に小社を建てひさせて　仙里
納豆汁る水仙ここ　蛍谷
針摺れ側て社ていむつまき　朝望

多を入ふ
白なり奥
又氷

おらき珠
数れ数ん
のんもあり

松をも見せ
ま地もむる
くせめて

針の原を
をををを

初めのるし　大学校へ入学どもの事　春風

菊屋新田　吾妻の門に漕ぎ寄せ　又曲

玄蕃名、後場のるし　ひけ　ひけ　と小柄のため　蓮之

仙立下　門に立つ　くるると津の国　青蔵

るの辻の名　旋毛なり　土用さんへよわかき　七夕　風梨

生作　亜こめてくるり　笠作　蕪馬　沾徳

京紅葉川　竹先をなき　捧さや　さん坂　沾洲

町の角にあり　通夜の教思ひ　望て業螺ふ　沾山

古々浦沿　さめき　八つめ竹　芽蕗　ふ　竹出　直侯

ねきをさのこ　ふ　ふ　心社　社　金つ　竹　果ら　ふかけき乃　森竹　兼　祇空

ふているけ　ふ　森とふ　ふ　先ん　竹　ふ　と　垣の　ふ　ふ　蟬　為谷

ひさひめ女の　商人より来れ　旅人なれふ　るせ

勢田夕照　沾洲

鬱女や草はへかくる橋塚　義亜

のひろ瓜四ろ鶴乃目竹　青我

子笹竹ふとする日ハ菖蒲　賀燕

すのふとりよ毛の不見有　沾竹

今年からけせんしやく秋給　佳風

ふつかとかりろ白髪竹長　立志

諸の舟ふ小人一人屋の月　仙里

吹笛ふ仙の鵠鶴（サイ）鷸（イ）とぶ

城の流乃浦辺やふ仮枕　西積

至てちいさき鳥し的のる

火を袖を消へこのけて　沾文
三月立する人を律義や　因友
中臣演と鎌をひつさけ　半鱗
山ハ宮祐を祐ふく縮る　淵舟
日はへ晴まきを毋ハむろく　沾宇
多夕と見ぬきいてをひきはづき　松巴
湘とのく　ひとつたしは竈　沾枝
枝むくへよくふる井戸奉加帳　沾吾
破よを洗しふんてのえやこう　沾果
物見を　蕪へをて寒ち月　可去

朝夕ハ書ル
ちへしたし
夕ハ夕見ぬは
ゑもあれ行ゑ
ゑ見ぬ

湘ハ
むとまるる

ありけるを
たふさけ
ゑ
みよのかた
むとてよつる
後撰を下遍昭

中原相模之
孫の子西

雄黄硫黄もこさかて簑(蓑)ゑて　月下
をれ打こしゑふきけりるとハ　山夕
風よすきぬけくりんぬさ入ふ　朝望
二
節句し衣笠山乃まれ百　東石
犠さへつのめ仕ゑをひ菓子　秋を
をを引てせめてよは四星よ　青珠
ほ迄(を)ハ(と)ゑ迄こ言語すり来る　序今
思ひつをい孤をふる弁筬　文東
云事ゑをさも中原乃砧　和推
ふゑめ乃伝云せむる鶏ゑ声　雨椿

換料ゝ借る夢多羅ゝ月　野渡
唖の喉覗いて五ゝも妹の池　蓮之
將棄ゝ亀て源氏を吹　戀雨
ゝゝゝりのりんこ光院ほゝゝけ　又四
仕長者ゝ小ゝ成中表見や　立志
ゝ十ゝゝゝゝゝ夏の雲　仙里
加強抱ゝ馬士丸横面ゝ　治德
誰ゝゝゝ二ツ巴乃ゝゝけ　朝叟
嫌ゝゝ　ゝゝゝこまる木彫　松巴
子猫蓋ゝ向ひて簾ホキ掛ゝ　治文

条蹴なり

閑ゝ点ゝつ鳴ひとつ川　少夕
五月風ゝゝん乃月の池ゝゝ　治丹
ゝゝかいさと法問をする孫　青峩
天竜へ一天入もるきは孫辺　戀雨
めゝゝる革この男ゝ姫ゝ　治舟
英精の絵掾つくめ出ゝ　賀邑
吸乃鍵を迅チきちゝ　㊗左
田村ゝゝゝゝゝゝゝゝ　治宇
男ゝゝゝゝゝゝゝ清渇　雨磧
遠去へゝ金矢を砺ゝ　佳風

新古の用例
ゝゝ巡し
葉入の袋ゝ
ゝゝの句

藥の絵し

田村川　相模
大山の下し

俳の宰殊まこのすまや　青琇
信濃へ乃約束袋面こゝ　沾枝
蓮歩くよ鳥おてりあふ　沾竹
さんまいるのきハ伯母ともゝよんく　野波
桃むしろ小路ゝ細道　蓮之
ふほらしきゝ鼈の毒ハ無　秋色

宮女のあゆむ形容なり

去れ勅命を傳ひきほと之
後の御門を反古なるみちん　沾芝
なるさものゝ去るなるは　序令
とゝ切徳円満理　めるやまの方ゝ　東秋
三去三不去　不去をゝ入れわやゝ競　月下
考力伐掛ゝ　神の月

従生へまくゝ乳根を杜冊より　可圭
うきてさの額さし出ハ柳敬　半鱗
加茂をゝ参細ひろかり　文東
味なさハ景きりはゝ二三日　和推
鑿よまるは十貫目為　雨橋
そなさよゝ指からるゝ　西磧
伊達ゝ日に増す芥子ハ年　賀蕉
昔時ハ株角くきまいゝ　吉我
川を振ゝ立草摺　仙里
移ゝもさゝひわるゆ浦里　野渡

拾遺別
つゝれたゝ
のゝをたゝ
掛さてあ
へさ泊とを知
ねゝ元暦は製
元陳の句

大筆さえて高も近つく　沾宇
このゝいつのそゝ迄ゝあらぬの菜食や　東子
気ずも入らるる物屋ぬ井戸　沾徳
面もみよ身と映炮と庵の雪　山夕
朱喜集註と夜明せはまる　佳風
記憶てを葛岡屋持る一束　沾竹
ちたくゆへゝ放吾気し　文魚
新鐘脇れ上を八世ずもよ　沾舟
三階乃下話利休てもなき　沾枝
名　文東
玉屑も鮓乃鰊もち講水

吾を冥始ら
解えるを
てゝ知すて
らるもえ

葛岡屋
西代勅勘
あり新蔵

大教の僧慶井稲ゝ成る　月下
月もゝ知ずこも要ず貯ゝ須　因考
小進この名ゝ年舞蔵追ず　半鰊
仏を焼匂ひ伏ゝそゝす情　青陽
神輿の神みゝ尾こきをゝらす　蓮之
そふあゝと白ひ火つくるまて　百樹
きひそゝる篇　編ゝ　沾文
下雨ずと見せもなゝる紅窗　沾滋
何のゝ成屋と節ゝ立　沾宇
思いまゝ陳ゝ女吉特　立志

古條が教年れ
小進ゝ近代
鮓の切者ゝ

むゝ火人を
ほゝく三殿
るとゝる
ゝ思ゝ

浜関寺　玉
今ハ六殿て
ゆへゝあを
のゝし

さそふ遊いとめ合はせ　和推
まハ孔奴　並の奴れらや町　沾芭
糸をぬ　ふるふるふや松風　朝叟
半歌箱をもろこ舟もろこと　可圭
世を観すきもれ　ちさや哉　序令
紫ハ玄狐の色れかならす　松巴
ちこのをても古歌を　戀石
人の孔菴もん系瓶となつき　佳風
弦を土産ふく　れもれよし　沾井
十家謡を潜てもつなく　風流　秋色
夏茅しれ蒼木乃葛　東石

ふる屋あやしき迹　女をとあ　れ上方朝し
鹿猫日なの　ふきゆを
人のふけひ　ぬをふ

矢橋帰帆　沾洲

矢橋ふる人のうて　橋狩
水ここのふへる鼓　仇　保姫　沾石
糸桂城ち年ゝ弦仕ゝ　谷　白雲
ふ石ん場ゝ鼻ふの　東雲
卯ハ玄鵬雛と月利立　凍雲
俄ふくめる傷先ぎ　一泡
三つかりと名月ゝ今年月　岩翁
松のあは鶏ゝ乃れ　仙字
盃ゝ嫁ゝ　傳　有　雲凍

きみよ乃三条今よりつら　井谷
遥く切る髪おくるやらま　沾荷
まい京まるて孔雀陽茶　南盛
乃乗と世はしさ猫も夏月　一雲
世紙ハるを、のゆき世の平　千里
待ハ指　揮まをいをかしき　倫里
札り切る松杉ゆをと　几雲
石と芝燈も残りを残り　皆可
上すまるとれ三あ紙無　雨亭
二言とのかいをせそ大こ　貞佐

仏ゝ遣ゝ
遣ゝ角きと
ゆゝ
立春の解

京より伝馬
第五句解

ゝるめん
よゝねと
句の形容
よてゝるゝ

菜月待
なゝゝをを
いとひて行
後ゝるゝ
ゝきハ後の
よあるゝ

客死ハ京方
るゝゝゝ

俳諧の事

夜泊の斷汐ゝ指　きゝく　晋如
は程よあらゝゝゝ　桜の　乱聲
面羅めゝ京後菜日待乃鈴　庵令
二
赤鱈ゝ耳ゝ杉込ゝ雨　湖宇
ゝん　ゝゝのゝ簾ゝ祐　千泉
大切ゝ誓文ひとつ四ゝ有　回川
戦死客死昔角の上　路牛
菊角の十よいとかゝ以近原泊室
この本菊を杉ゝ持　千江
嫁へをいゝゝゝゝ輝原　翠風

切ッてはつせもの菜洞むや　西宇
十六夜よりつゞく履の数を云　子簾
今年も腐家八幡草刈　風葉
いせ鯉ひくとゝもわすれ　玉尋
庫裏の窓の毋乃後見　仙鶴
存ぶる向ハ色沢ゆゝしく　晋好
計とゝ菜ふかりねちゝ　沾霧
二月
瘡れるゝ物なるまゝ絲をむて　甘谷
仏ひゝしゝ菜絡れさく　雪凍
こゝかゝ色沢ゆゝ白色者　子江

放生会の句

阪上の笹よりしてい分るゝ毋の姿ゝ見ゝ
たゝてほゝを云

六月六日

おゝの海よりかゝえ
ゝ出ひる風
るゝれゝゝも
ゝゝもゝ
ゝゝゝゝ

もゝしるゝ　回川
棺へ花車入るといひし人もの　沾徳
木具よりいと古く六条乃君　乱絮
云名ある贅を拾ゝ玉ゝゝ　雨亭
さいゝい車ハ神やゝゝすゝ　岩翁
ゝゝせ給ハ苔おれ修ゝ苔を　沾石
星石ゝ拾ゝ見ゝ来む　凍雲
月しゝ苔十年ゝの月ゝゝハ　路牛
ゝもゝめ中ゝ尾灯一すゝ　徳宇
花のゝ筏ゝとゝ　兵乃時　一泡

六条ゝ景ゝ

を僧ゝの色
る乱河ゝを云
てゝゝゝゝに
の苔ゝとゝ
ゝゝつゝゝ

前垂島
大坂の川ゝ

まも昭く苔い草なり　貞佐

三

糸ゆふ出さてはんはんへぬせ　序令

わるうまうり役ひろる　子麓

りもん戸をたちる宝ぬる　仙宇

る醫と馬醫とのあるをえた　一すう

三絵は綱いない笠無よしさ　白雲

ふ石印はゆうあるを　仙路

塚こさん弛をとをくを思へ　几雲

揚屋の神も非礼をもまさ　喬谷

十冊てはらめる吉恠をうハ　市盛

猥みて盗難の白最明寺い身のが怪うめ修行者をえた

混雑の場い神もゆるしのうんとう

中庸の詰

絶うを継くまうは役舟　皆可

会せ砥よ筆てもを水を吸末　千泉

饅頭をむくに月てを向き　浮生

は庸筆えをにて史へきん　先の庸和けるねひおすん　千魚

猪ハ人家ま近く　苅二すめさん　投敷牙川　琴風

庸ハ人家ま遠きものて　三　ま幾内て猫板油ひらき　海宇

とこむ　お場　商て　義助　駿州　峰田の搬送て　猫とうもの立をれめか　玉琴

こうんとハ九死一生安事ね時　風葉

夜ほよお出と義助の延　倫里

蛙をを使らハ二尊三神宜　貞佐

紙子ノ火打之
年よ入てなば
んを

やわらゆふくれ月をかゝへみなから　沾石
世の中ハ火打師も(替)組ん　沾露
年ハ暮ぶあらて琉球　晋如
八条の簾まきてや咲ほころぶと　子簾
書とめのれおくすへる人まつ　甫盛
梵天にまゆさむき汗ハ月　凍雲

商星東也
参星西也
二ツハ星也

商と参とはおへ分か宵須　几雲
それも文口比らいさね馬寺哉　玉尋
飈風の積塔ホんとと　千泉
名ノ
戯言とハ私(替)聲寄に出会へ　池宗

私云ハ六里がさ玉津嶋姫　沾徳
留男にも眉も一ヶ所面白さき　仙露
牡丹をまくく思いふんとし　仙宗
本社とハ紙なくしろ牛もを　皆可
八尾久寶も備て色り　一漁

振列のゑ
易坤卦　履(云)
霜堅氷至(イタル)
口て説ハ似より
云あやまりも
あらんとし

翁をかへし敵役も成かり　海宗
尻ての仮も魯魚比りやまて　序令
裏くて容更とぶそとや　乱紫
扱き帯は火りつねておうつき　白雲
小便もかうき世男にと通しけり　岩翁

笹竜の新
葉の匂ひ

笹竜胆一時化ちらすこき　千里
啄木鳥のゆの感月雪ゆ　四川
検見の貴高山ちんすへ　路牛
原窓の鶯衣ゆ伯母様ゆ　倫里
笑顔をいつ八先小指や　風楽
庭ハゆ灯んを引ハ面　甘谷
すきぬ我と獅乃膳　子江
腰祈　狂言之
世ゆ人の古ゆ人ハ淳和のこゆん　琴風
なんなり　鞠子を迎ゆ代八　雨亭
すりこ府中の繁花を云　一煙花たふゆ　雪糸
胃和らこの様をゆ　子廉

三井寺順礼
観音とゆ
堂あり其場
にて途中の
順礼の札を
やき捨ゆ
早竟弘法
ものゆ
捨ゆ
と
つゆ焼い
六月十五日し
月ハ我ゆ
東方既白
ナントス
ゆ伝え

三井晩鐘

札焼ゆ惜いゆの鐘
鑿鏡ゆ奇山寺ゆ　仙霧
神風ゆ牧の尾筒ゆ　序令
水ゆ秋ゆ食物ゆ　椿子
南丸の桃とからハ　沾山
月ハ我ゆ唐人秋ゆ　柯木
関伽乃十日の角を負ゆ　半鱗
筒乱ゆハ篠ゆ　東水
女房ゆ鼓ゆ　沾岳

沾徳

塔幸搭へ寄るお坊
誓願をいなせる精舎看板よ　祇空
弁の雲をのそくはなとけ　白雲
あちらへも所々寄このわ雪　詰化
ものゝふひもたる山茶も　安士
石臼を二度ゝとゝ年久　紀推
元舟のしれ搭さる茅　蓮之
多形ゝまゝ神ゝ色ゝ　佳風
新ゝのりけるとゝんば市数　詰州
日よやけしいな麦会ゝ山茶　晋如

かるめゝゝ
塔町しお俵
れいた仏なり

無なき物を面
白くなり作ゝ

中神　天一神
伊勢宮之
あり
大和之祝あり
ゝる　伊勢集

嵯峨の亀山ゝて
なくて坤下の
亀山とゝ

新勅撰賀
ゝ神さを苦い
神ゝつゝ
ことひい成ゝ
あすりめゝ

硯ハ文殊の眼と
いつゝけゝ
石と云硯ゝ
かくめ内とゝ
原氏搭姫ゝ
ゝゝり

喧嘩さきゝとお刺をしゝて　蓬月
嵯峨山ゝて亀山ハ亀山ゝて　雨磧
ゝゝよめゝ乾魃ゝ　独活　仙芝

二

薮入をゝ何ゝ包ん舟ゝ　只尺
嵯詞りん弦へ変ゝ雑巾　可圭
ものゝゝ紙ゝあゝを何ゝん　文東
文殊乃白ゝ出ゝおゝ老　酒舟
縞ゝゝ母ゝ腰つきゝゝ　三舟
鮫をゝめゝゝへゝゝゝ　嘉我
髪結乃ゝゝゝ新ゝ　一和

吹上見んと喋まるの
晋如
名詩外ハ髭月沖おく
沽化
庭を以て客酒を出す客
序令
お伐さりよりのふらハとまぬ棘式兼
仙鶴
あはせらきこと火立てさらく
和推
以月抜きより刹を数かり
桃子
乃せく戻きる鬼と芦の穂
半蘇
杖もん格こと
柯木
然雅この多のよ宿之
只尺
起ゆも次先不同と並拓桂
沽洲

伊丹鴻池ゆ
とのの
下屋敷ゆ
サし女ゆ
ゆ人ゆ

名所を惜こと

大名衣の
旅切の姫を
ものなり

泉涌寺 江戸
三田にあり丹路
者への灯籠
なり

淀を出船を牧まて礼
沽涌
おくれ古よ奴来細ゆ
仙芝
就鳥よ今新引墨る梵天
沽山
灯ん乃夏をあめや濟海寺
蕉月
名ゆらく帰ゆ親新屑
雨磧
おやく吸口なくて五月待
可圭
神社の的ゆ射よ国のせて
釵梁
二川井ゆ新仕来よ向
蓮之
胡蝶ゆつく黄疸の夏
佳風
ふらくを離きて尾よ月し
東水

あらく 軽躁
漢武後庭
縄戯也ゆ
ゆく

三

毛宮ちの天狗酒とり　白雲
厚次郎行の一句い越中へ　安士
信長公ノ筆物　屋敷地ハ　沾岳
下市ハ碧ヶ　化めくかきつを　青峩
清水観音堂　銘お三有　つへ存ハ形　文東
こうむらく　関ともいはこのきさらや　湖十
の芝まき　来るむさろひも人のるれ　一和
亀しこう　ハの歌一通り　紙空
なり　さて代日まらいおるはるのう　三外
例の絶入り例ハ衣く　反積
朝夕屋根ハ　ばきら天守番

秋風辞ノお　柯木
世飯煎と　半鱗
ゆて白い者　椿子
むるこぬん　佳風

田会よりて
あるるし

一丈ここむ魚乃筆　田中
こを待こ元形歌を切蔵　半鱗
石土を初る　椿子
拾ても月ハ　佳風
伊丹きを背戸のお智　蓮之
かハと投こ　晋妙
田をこの極女きこて世　沾洲
盆山をひろひのれる立衣　安士
拾ここ名も割　昆布　可圭
的来ハ藜ハ　枯きく　沾岳

孟子滕文公上

伊宮 仁和寺宇多天皇御庵室依てお宮と云

朝長の能

名

仙芝

東水

文赤

序今

沾涼

仙霧

三秋

青月

叙梁

筑波ろうろう孫まの戸樋

懐ろ馬はれ金の色亦なし

茶屋乃脇ゝ水引湯はれ火

むつまし夫れ沢乃撞木とる

癸癸はれ我宮とめを

戻かきを又のうゝら麻衣

下ゝはいさひ 巣かんてはく

何の行ゝ東海乃はれ波の色

易訟卦 天与水違行訟

訟の卦（法と合けゝつらさのゝ）

阿ゝとしゝゝねと

や家の弱のていゝ

陳てゝを通はゝし

青我

白雲

仙芝

紙空

和推

沾化

一和

沾岳

沾山

美男を門下編笠を評　佳風
神木を引分ちを感応　仙鶴
ちくてきし麩を敲るやう　白雲

堂上方の弓矢　小路名なるとの波も越から　青嵐
世中ミナミ小路　より何の中路　成り出ーあから法の笑ひ　一和
るとく小路名を　ゆふさ路なり　絶らえとおもき杉戸を外て明　治徳
ゆふさ路とうけて　ねうきさ世を　美よいとものしやとく力ら火嵐　三鉢
ゆふ路とうけて　乱るる風板と　乱るる摩沖もかもも同朝　治化
嵐のうハころと　竹とも波　宣ゆ自道頃も鑑波ーとる後　半鮮
竹とも波　花の垣法人ゆ中馬二月　序令
石化といへば魅子といふ　錄